

世界199カ国(持説)、それぞれいい所もあれば悪い所もある。

日本のメディアは、外国のいい所ばかりを強調し、こういう所が日本には足りない、という。いい所が何故存在し、何を犠牲にして、しわ寄せはどこに行くのか考察もせず、自国を責めるばかりだ。

両者のバランスが絶妙で、世界一公正平等なのが日本なのであり、こんなにいい国は他にない。分母の「欲望」が多様に存在しながらも、分子の「満足」を何とか満たしているのは奇跡的ともいえる。

そんな日本を好意的に評価し親近感を抱く、三人の国家元首がいる。

キューバの故フィデル・カストロ元議長、世界一貧しい大統領と言われたウルグアイのホセ・ムヒカ元大統領、そして、東ティモール独立の父シャナナ・グスマン初代大統領：皆、革命の戦士であり獄中生活を経ながら、「理想」のため銃を取った稀有なリーダーであり、質素で庶民的な所も共通している。

欲望(分母)の基準が低い社会は、極端な不満足は起こらないが、成長もまた期待できない、というジレンマがある。

分母が膨らむ資本主義国家でありながら、奇跡的な「幸福指数」を維持する日本、そして、それを可能にしている「国民性」に親近感を抱くのであり、社会の隅々に社会主義的ケアが根付き、相互扶助や公正平等

## 『幸福指数=満足/欲望』

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

な制度を、実直かつ誠実で勤勉な国民性が支えているからだ。

欲望の内訳には、国によって大きな格差があり、「空爆さえなければ：」「虐殺さえなければ：」という最低限の欲望を必死で願う流浪の民もいれば、「最低限の衣・食・住」「仕事さえあれば」という低い欲望に寄り添って暮らす家族もいる。世界の至る所で、われわれ日本人には到底耐えられない低い欲望を満たして笑顔で普通に生活する人々が沢山いるわけだ。

ゲリラの闘士から清廉質素な庶民リーダーとなった彼らが揃って、日本人に「理想の一端」を重ねるのには、理由がある。

絶妙な社会主義がちりばめられた資本社会：勤勉、実直、誠実だからこそ、行き渡る相互扶助、その簡単なようで難しい「国民性の浸透」に、驚きと感動を覚えたに違いない。彼らの目指した「理想」とは、そういう「モラル」が自然に伝播された共同体であったのかもしれない。

だが、当たり前前に「健康保険」を使い、薬を食う今の日本人には、俄かにその有難みを感じ出す事はできないだろう。

古くから、「足るを知る」という言葉がある。

偉大な革命戦士たちが挙って共感する日本人の「共同体モラル」：

長い年月と民族性が培った「宝物」を決して錆びつかせてはならない。



### Profile

安全保障・教育評論家／1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に『概説戦後学校教育』『武徳教育のすすめ』。



美楽での連載を束ねた百念撰集  
『雲涯蒼天』  
定価700円  
Amazonにて販売中